愛知教育大学研究報告，42（人文科学編），pp. 101～110, February, 1993

ユイスマンス研究
―『彼方』の背景―

岩渕邦子
Kuniko IWABUCHI

（ヨーロッパ文化選修）

(1)『仮泊』を書き終えて

ユイスマンスはアンナ・ムーニエの治る見込みのない神経症に悩み抜いていた。

―Ah! les femmes! les femmes! Quand je pense à la mienne! Le mal fait des progrès. Le pas à pas horrible s'accentue. Pas un médecin n'est fichu d'empêcher ça! Ce dénouement! La démence! La démence! Il y a des moments où je suis plus désespéré que le *Désespéré* lui―même qui lui, au moins, se soulage en gueulant comme un putois ou comme un lion, contre le ciel et la terre! Ah! si j'avais la foi …

―Vous l'avez en votre œuvre!

―Mon œuvre! Mais je ne suis pas plus heureux en amour avec elle! *En Rade* vient d'être, pour moi, une grande passion. Je m'y suis abîmé avec enivrement, dans l'ordure des âmes et le néant des choses, mais c'est fini! Je n'en veux plus de cette porcherie de naturalisme! Alors quoi? … Qu'y a-t-il? Peut-être l'occultisme. Pas le spiritisme! La filouterie des simulateurs! La pitrerie des médiums, et le gagatisme des vieilles dames qui font tourner les tables! Non, l'occultisme! Pas l'au-dessus, mais l'au-dessous, ou l'à côté, ou l'au-delà de la réalité! A défaut de cette foi des primitifs et des premiers communiants que je voudrais avoir, il y a là un mystère qui me 《requiert》, et j'y pense. J'en suis même hanté…[1)]

これはユイスマンスが1887年にギュスターヴ・ギッシュと交わした会話の一部であるが，『仮泊』脱稿後の虚脱感が伝わってくると共に，アンナの不治の病ゆえに彼が如何に深い絶望感に捉われていたかがよくうかがえる。彼女はすでに医者から見放されており，ユイスマンスはかつて愛し，長年妻のように遇し穏やかな愛情関係をとり結んできた女が，今は刻一刻と狂気の闇に呑み込まれていくのをなす術もなく見つめていなければならないのだ。

「もし私に信仰があれば…」と彼は口走っている。友人のギュススターヴ・ギッシュは，無神論者で通してきたユイスマンスがまさかと思ったのであろう，次の彼の言葉には，気弱く神にすがることなど考えなくても，君には全身全霊を打ち込むものとして文学があるじゃないか，という慰めと励ましの気持が込められている。ところがいつものことながら，ユイスマンスにあっては執筆中，どんなに熱くなっていようとも脱稿してしまえば高揚した気分は跡形もなく消失してしまうのである。いいようのない嫌悪感さえ襲ってくるよう

だ。「もう自然主義の豚小屋はたくさんだ」と彼はつぶやく。

『さかしま』で面目を一新し，周囲もそれなりに評価してくれたのに，『仮泊』では心ならずも逆流現象の如き印象を与えてしまったことが彼としては何としても悔まれることであっただろう。だがいずれにせよゾラの風下に留まる気のないユイスマンスは，ここで神秘主義に目を向け始める。本当は，中世の芸術家の魂の中には確かにあったと推察される激しく純粋な信仰にあこがれているのだが，まず第一に霊界の存在そのものについて半信半疑である，そしてたとえ神の存在を確信したとしても所詮19世紀のデカダンな自分には無理だとあきらめているのである。ユイスマンスのこの屈折した気持は事ある毎に繰り返し表明される。

次にこの手紙に注目ししよう。

> Or［déclarait-il］je suis las des théories de mon ami Zola, dont le positivisme absolu me dégoûte. Je ne suis pas moins las des systèmes de Charcot, qui a voulu me démontrer que la démonialité était une rengaine, que, lui, développait ou mâtait, en pressant sur des ovaires, le satanisme des femmes traitées dans les salles à la Salpêtrière. Je suis las encore, s'il est possible, des occultistes, des spirites, dont les phénomènes, bien que réels, sont par trop identiques. Or, je veux confondre tous ces gens—faire une œuvre d'art d'un réalisme surnaturel, d'un naturalisme spiritualitse. Je veux montrer à Zola, à Charcot, aux spirites et autres que rien n'est expliqué des mystères qui nous entourent. Si j'ai une preuve des succubes, je veux en attester l'existence, démontrer que toutes les théories matérilistes de Maudsley et autres gens sont fausses, que le diable existe, que le diable règne, que sa puissance du moyen âge n'est pas éteinte, puisqu'il est aujourd'hui le maître absolu, l'omniarque…[2)]

これは1890年，次なる作品執筆のために是非とも必要な資料の提供を求めて，ユイスマンスがリヨンに住むブーランに宛て書いた手紙の一部である。つまり先のギュスターヴ・ギッシュと交わした会話からは約3年の月日が経過しているのであるが，ここには明瞭な変化がみてとれる。それは次のように要約できるであろう。すなわち，今やユイスマンスは霊界の存在を確信しており，それを頭から否定してかかる実証主義，唯物主義で凝り固まった作家や科学者（ここではそれぞれ身近な例としてゾラとシャルコの名をあげている。）や，霊を口にしながらその実，まともに霊界の真相に迫る気など毛頭なく，単に気晴らしや金儲けの手段にしているに過ぎない，低俗な神秘主義者や交霊主義者達に対して極めて戦闘的になっていることである。事実，ユイスマンスは文面にみられる通り，次の作品では霊界が実際に存在しているという事実を先刻の連中に突き付け，とりわけ中世にまさるとも劣らぬ悪魔支配の実態がみられることを明らかにしようと意気込んでいたのであった。

ユイスマンスが先に見たあの1887年の『仮泊』脱稿後の虚脱感から抜け出し，次作とりくみを控えて燃えるような意欲にとりつかれるに至るまで，一体何があったのだろうか。

(2)リラダンの手引きでパリの神秘主義者たちと知り合う

ヴィリエ・ド・リラダンは11世紀以来，連綿と続いた名門の出で伯爵を名乗っていたが経済的には全く零落し，最低の生活を余儀なくされていた。しかし生涯，貴人然としたプライドを持ち続け，唯心論者であった彼は科学万能思想に浮かれ，功利主義を恥じない世の風潮を嘲笑していた，が悲しいかな，詩，戯曲，小説と作品は発表しながら一般読者に対しては全く無名の存在に終始した。リラダン自身は世俗的な成功など眼中にないといった様子で，少数具眼の士との交際で自足していたという。このように彼は世紀末風の風格ある一大奇人であったが，幸わいユイスマンスはその数少ない友人の一人として遇され，1889年の死去に際してはその前夜，マラルメと共に遺言執行人に指名されている。つまりユイスマンスは，10才年長のこの奇人から大いなる信頼も寄せられていたわけである。自身，神秘主義者であったリラダンは，ユイスマンスが霊界に強い関心を抱き，こういう方面の世界を知りたいと彼に打ち明けた時，手引きの労をとってくれたという[3]。

こうして1888年，ユイスマンスはリラダンのおかげでショセ・ダンタン街のあある出版屋を知るようになる。エドモン・バイイがそれを経営しており，バイイ本人が中心となって，*La Haute Science* という神秘主義の雑誌を出していた。この出版屋がパリの神秘主義者達の一種の溜り場になっていたらしく，ユイスマンスはここで目ぼしい人々と知り合いになる機会を得ることが出来たという。すなわち，エドゥアール・ドゥビュ，スタニスラス・ド・ガイタ侯爵，ポール・アダン，ジェラール・アンコース等である。ドゥビュはモルヒネと魔術を愛好する若い詩人であり，最近，バラ十字カバラ団を発足させたばかりだというスタニスラス・ド・ガイタ侯爵もモルヒネ狂であった。ポール・アダンは作家，アンコースは厚生省の役人であったが，別名をパピュスといった。

更に1889年のパリ万博の折りには，ユイスマンスは，再現された16世紀の錬金術の実験室を見物中，博識の科学者，ミシェル・レジニエと知り合うことができた。レジニエは後にヘルメス主義の資料の件でユイスマンスに大いに協力した人物である。同じく1889年の夏にはジャーナリストのジュール・ボワと知り合う。ユイスマンスはボワがリラダンの死を哀悼して書いた記事をみて彼に一目置くようになったという。

以上述べたこれらの人々にジョゼファン・ペラダン及び2名の女性，すなわちベルト・クーリエールとアンリエット・マイヤを付け加えれば，ユイスマンスが一時そこに身を置いていたパリ神秘主義界の人的環境はひとわたり見渡したことになる。

これらの人々についてバルディックが余りにも淡白に述べているので事の重大さを危うく見落しそうになるが，ロラン・エディゴフェルの『薔薇十字団』[4]を参照すると，ユイスマンスが如何に驚くべき世界に潜入していったかが明らかとなる。

エディゴフェルはその著作の〝薔薇十字団の再興〟の項で次のように解説している。〝十九世紀の後半から薔薇十字団を名乗る団体が相当数出現した〟と。勿論それは欧米の範囲を問題にしているのであるが，スタニスラス・ド・ガイタが1888年にバラ十字カバラ団を創始したのもそのような現象の一としてにみなされるべきものであった。

エディゴフェルは，そのガイタのバラ十字カバラ団が，ジェラール・アンコース，ジョ

ゼファン・ペラダン，ポール・アダン等，異色の面々を含んでいた点を評価している。とりわけアンコースはマルチニスト会の指導者で，ロシア皇帝ニコライ2世の顧問を務めた程の人物だという。更に同書の註によれば，アンコースは神智学協会，フリー・メーソン，ヘルメス学校等，多方面の活動に積極的に関与して「オカルト界のバルザック」と呼ばれ，フランス・オカルト界の大立者であったという。彼は1901年にニコライ2世に面会を許されて以来，彼の霊的師匠，フィリップと共にロシア宮廷に進出することを繰り返し試みたが，最終的にはラスプーチンの影響力の強大さには対抗できなかったという。

バラ十字カバラ団の創始者，ガイタ自身については次のような解説がみられる。〝フィレンツェの貴族の末裔であるスタニスラス・ド・ガイタ（1861—97）は談話の名手でおまけに大金持であったが，オカルティズムとその象徴体系に魅せられた。そこへ彼を導いたのは『錬金術とフリー・メーソンとの関係におけるヘルメス学の象徴体系』（パリ，1910年）の著者オスワルト・ウィルトである。〟ガイタ，ウィルト等の名は，タロットを中心テーマにした種村季弘の『愚者の旅』[5]にもみられる。〝薔薇十字団運動とタロットの関係は，17世紀の薔薇十字団運動の衰退とともに稀薄になったが，その後フランス革命前後の動乱期にふたたび緊張した。その代表者は先にも名を挙げたクール・ド・ジェブランであったが，タロットのエジプト起源説を提唱した「ジェブランの発見は，ときあたかも人びとが薔薇十字思想やフリーメイソンやカバラや占星術に関心を燃やした時期に相当していた。」（イーデン・グレイ）。それからさらに一世紀後，エリファス・レヴィ，パピュス，スタニスラス・ド・ガイタのようなフランス世紀末の隠秘論者たちがふたたび一斉にタロットの神秘に注目する。薔薇十字思想はこのときにもなにがしかの役割を演じた。エリファス・レヴィは「薔薇十字協会」に加入していた。スタニスラス・ド・ガイタは「薔薇十字のカバラ団」の創立者だった。有名な『中世の版画師のタロット』の著者オスワルド・ウィルトはガイタの秘書であった。〟

(3)グリューネヴァルトの磔刑図と出会う

当時，パリの神秘主義者達の最大の関心事は，ノーンドール父子に関するものであった。ノーンドールの息子は自ら〝ブルボン家のルイ＝シャルル王子〟であると名乗り，従ってシャルル11世の名でフランスの王位に就く権利があると主張していた。その父親，自称ルイ17世も同様，自らに王位を要求していた。実はこの父子の王位要求の主張自体が，主に神秘的な天啓に由来するものであったため，ありとあらゆる種類の予言者，交霊者，魔術師，それに一部の聖職者達までがこの件に強い興味を感じて群れ集い，一種の運動体が形成されてしまう有様であった。彼等はノーンドルフィストと呼ばれた。

ノーンドール父子に王位を要求するこの運動を盛りたてるため『ル・レジティミスト』という名の週刊紙まで作られ，そこにはこの運動に肩入れしていたリラダンやレオン・ブロワの名がみられた[6]。ユイスマンス自身はこの運動にリラダンやブロワ程のめり込むことはなかったが，これを題材にした小説は書きたいと思ったようである。事実彼は1887年の秋にはその小説の構想を友人達に語って聞かかせたりしていた。しかし，現実にその小説が書かれたのは3年も経過したあとのことであり，しかも構想自体が大きな変化を遂げることになった。

はじめの構想通りならばそれは神秘主義者達が入り乱れる複雑な政治小説の様相を帯び

る筈であった。それ用に特別集めた膨大な資料を捨てまでユイスマンスがこの構想を中止するに至ったのは，実はドイツ旅行の折り，カッセルの美術館でグリューネヴァルトの磔刑図との出会いがあったためであった。それは1888年の夏のことであった。

前々から彼は〝感覚以上のものを排斥〟し，〝空想を否定する〟自然主義文学理論の偏狭すぎる面に苛立っていた。しかし，納得のゆく解決策は見つからぬまま，理想とする文学の理念のみが先行し明確になっていった。すなわち〝題材の真実性と詳細描写の克明さと写実主義独特の息苦しい神経的な言葉とは守らなければならない。しかしまた同時に霊魂の井戸掘りとなって神秘を感覚の病としてばかり説明しようとしてはならない。〟小説は〝実人生と同様に互いに接合したいやむしろ混和した，肉体と精神との二つの部分に分けられるべきである。そしてその相互の反動や相剋，和合などを研究すべきである（…）それは現実のかなた，未来の境地へ達するもの〟でいわば〝心霊的自然主義〟というべきものである。

文学にみるべき手本がないまま絵画の領域に入り込みそこで見まわしているうちにユイスマンスはついに彼の夢想した理念が完璧に実現されているのを発見した。それはイタリア，ドイツ，そそして特にフランドル地方に見出されるプリミティフ派の芸術家達の作品においてであった。とりわけマチアス・グリューネヴァルトのキリストの磔刑図が彼に強烈な衝撃を与えた。

> （…）ああ！血にけがれ，涙にむせぶこのキリスト磔刑図のまえに立っては，文芸復興以後ローマ教会が採用した生やさしい磔刑図などは同日の談ではない。この破傷風のキリストは富者のキリストではない。ガリレアの美男子として四百年来信者の崇拝してきた，あの健康な好男子や，茶褐色の髪をして口髭をわけた，うまみひとつない，瓜実顔の美少年のたぐいでは決してない。これは聖ユリアヌスや聖バジリウスや聖キリルスやテルトゥリアヌスのキリストである。ローマ教会初期のキリストである。ありとあらゆる罪を一身にになうゆえに，また謙虚の心からわざといやしい姿をよそおうゆえに，見るからに野卑で醜悪なキリストである（…）[7]。

グリューネヴァルトの磔刑図との出会いが自己の抱く文学的理念の正統さを保証した時，ユイスマンスにあっては，ノーンドルフィスト達を書く意欲は失せ（それが余りにも卑近な世俗性に満ちていたため），俄然，磔刑図から蒙った衝撃にふさわしいレベルのものを模索し始めた。そして，中世の怪人，ジル・ド・レー，いわば〝15世紀のデ・ゼッサント〟が浮上した。享年わずか36才で刑死したジル・ド・レーは，悪魔的な罪を徹底して犯し，それでいてその死に際しては生涯の罪を悔い改め，最も高いキリスト教的熱狂に達したという。ジル・ド・レー研究とはまさに自然主義文学の信条，〝平凡な人間の単調な研究〟の全く逆をゆくことであり，ユイスマンスにとって心湧き立つ喜びであった筈だ。1889年9月には，ジル・ド・レーの居城，ティフオージュ城のあるブルターニュ地方の現地調査も喜々として実行した。

(4)バラ十字カバラ団の面々と敵対関係に立つ

極めて不可解な事ながらある時期を境にユイスマンスは，ガイタ，ウィルト，アンコー

ス(＝パピュス)といったパリのバラ十字カバラ団の面々と深い敵対関係に立つことになってしまった。それはユイスマンスがリヨンのブーランと接触し始めたことに端を発する。(1)の項で述べたように彼はサタニスムに関する資料が入手したくてブーランとの接触を求めたのであるが，このブーランなる人物は，もともとはカトリックの正統的な神学校に学び成績優秀で博士号もとった上でカトリックの司祭になったのであるが，その後彼自身が編み出した異端的な教義により1869年，ローマ教皇から破門されてしまったという前歴の持主であった。ユイスマンスはその点をずい分同情的に見ていたらしいのであるが，ブーランの経歴を詳しく見れば見る程，その教義の異端性に加え人格的にもいかがわしい点の多い人物であり，ぺてん師まがいのことをして刑務所に収容された事実まで存在する。ブーランは破門された後，その異端的教義にますます固執し1876年にはリヨンの地でカルメル会を設立し本格的に布教活動を始めた。

それから10年後の1886年，ガイタとウィルトはブーランの教団に潜入してその実態把握に努めた。すなわちガイタは同年11月，調査のため2週間程リヨンに滞在した。ウィルトの方は熱心な信者を装ってブーランに近づき，彼の教義及びその具体的な儀式の様子など全てを知り，更にそれらを文書化したものまで入手することに成功した。翌1887年1月，ガイタとウィルトは各自の調査資料のつきあわせを開始した。そして二人はブーランを告発しなければならないとの結論に達し同年5月に有罪の旨を書きつけた手紙をブーラン自身に送付した。

もっとも有罪といってもそれは私的な審判の結果であり，いわばガイタ，ウィルトの恣意的な判決に過ぎなかったし，ウィルトも彼等の言う有罪判決とはあくまでもブーランの異端性を暴き，世間に公表することをしか意味しない旨をブーラン本人に通告していた。実際1891年に刊行されたガイタ著の『サタンの寺院』が本来それとみなされるべきなのであった。

ところがパリからの通告におびえ切ったブーランは一種の被害妄想に陥いり，パリのガイタ一派からブーランの命をねらう黒魔術攻撃が開始されるのだと信じ込んでしまったらしい。『彼方』に書かれたパリ，リヨン間の眉唾ものの魔術戦なるものの実態はこのようなものであった。

ユイスマンスは当初サタニスムの資料をガイタやウィルトに求めようとしたのであったが，ガイタはまともに対応しなかった。ウィルトは友好的態度を見せ要求通り資料もユイスマンスに渡したのであったが，ユイスマンスはその資料を見て失望を禁じ得なかったという。それで彼はリヨンのブーランに着目したのであるが，それはブーランがバラ十字カバラ団の連中に恐怖心を起させているらしいとユイスマンスが見てとったためであった。パリの神秘主義者達を恐怖させるというそのこと自体にユイスマンスはブーランの優越性を見たように感じ，彼に長文の手紙を送りつけるなどして熱心にサタニスムに関する資料提供を求めた。

実は，ユイスマンスのそうした動きを知った時，ウィルト，ドゥビュ等はブーランの唱える教義の異端性やその猥褻な宗教儀式の有様を知らせ彼に接近しないように再三にわたってユイスマンスを説得したのであるが全く彼はとりあおうとしなかったという。バラ十字カバラ団はエディゴフェルも述べているように，宗教系私立大学かと思わせる程，カ

バラやヘブライ語等の教育に力を注ぎ，優れた論文が提出されればそれに独自の学位を授けるなど活発な学問的活動を行っていた[8]。ガイタ，ウィルト，アンコースそれぞれに神秘学に関する労作もある。しかしユイスマンスは彼らの学識や見識に敬服した様子はなく，否，明らかに見くびり，彼らの忠告や警告は一切無視してしまった。そして正規の課程を経て神学の博士号を取得したとはいえ，バラ十字カバラ団の面々に比肩するような著述はろくにないリヨンのブーランの方に信頼を寄せたのであった。

ブーランの死後，『カイエ・ローズ』[9]なるメモが発見され，それによりブーランの犯罪者，ぺてん師の側面が明らかになり，やっとユイスマンスはしぶしぶブーランの好ましからざる実像を認めなければならなくなったのであるが，だからといってその後，彼がバラ十字カバラ団の面々との関係改善をはかったわけでもない。それどころか彼は彼等への中傷的言辞をマスコミを通じて言い立てる始末であった[10]。ユイスマンスは結論としてブーラン，バラ十字カバラ団の面々の双方を共に黒と判定したようである。それは次の引用文に明らかである。

> (…) La phraséologie mystique de ce monde-là a surtout induit en erreur, je crois. Boullan était un satanique, cela est sûr, et Guaita en était un autre. Seulement, chacun prétendait être avec Dieu. Et tous deux mentaient.[11] (…)

ユイスマンスはサタニスム関係の資料提供を求めて接近を試みた当初，ブーランかから一番聞きたい事柄を引き出したくて彼に直接次の質問をぶつけたのであった。《Êtes-vous satanique?》[12]これに対してブーランは抜け抜けと否定した。事の経過からみるとユイスマンスはブーランのその回答を盲信し，ブーランの思惑通りバラ十字カバラ団の面々の方を黒魔術の徒と思い込んだもののようである。

はじめユイスマンスはサタニスムに関する資料だけが欲しかったのであり，ブーランの教義や宗派に何らの関心を持つ気はなかったのである。ところが結果的に彼はブーランにすっかり取り込まれてしまった。それは succube のせいかもしれない。事実ブーランは succbe の専門家を自認していた[13]。そして，1890年9月，ブーランのカルメル会の一員，チボー夫人がパリ上京のついでにユイスマンス宅を来訪したその夜，彼は初の succube 体験をしたのであった。ユイスマンスはそれをチボー夫人のせいだと直感し急にリヨン行きを決心した，ブーランに対する期待感が急速に高まったためである。

> Je file décidément, la semaine prochaine pour Lyon. Je suis mis en avant-goût des aventures occultes par la voyante, la somnambule du prêtre qui est venue à Paris guérir une possédée et est venue chez moi... Je commence à croire que je verrai des choses étrasges à Lyon où je suis sûr d'être reçu à bras ouverts…》[14]

ブーランのもてなしがおそらくユイスマンスの期待通りのものであったためであろう，事後，彼はリヨンのブーランの根城をとても居心地の良い所，あたかも第二の故郷であるかのように愛着し始める。1892年夏，イニイの僧院で初の修道院体験を終えた直後にもまるでその間の緊張を解きほぐすためかのようにリヨンのブーランのもとを訪れている。ユ

イスマンスはガイタやウィルトが猥褻きわまりないと感じたブーラン宗派の儀式にこそ参加しなかったようであるが，もし参加したとしても，デカダン修業を存分に積んでいた彼のことであるから彼等程それを猥褻とは感じなかったことであろう。又，ブーランがカルメル会の同志として常に身近に置いていた，千里眼の超能力を有していたという二人の女性（内一名が先刻のチボー夫人である。）に対しても彼はその不思議な力に感服しこそすれ嫌悪感は少しも抱いていない。

ところでブーランは1893年１月に急死した。ユイスマンスはこれをガイタの率いるバラ十字カバラ団の魔術による攻撃のためと判断していた。生前ブーランはバラ十字カバラ団の連中の魔術攻撃を言い立てユイスマンスを魔術戦に引き込み，護身の為と称してあやしげなまじないの術を種々彼に授け，ユイスマンスもそれを本気になって信じ忠実に実行していたという。これに関連した記述はゴンクールの日記にも見られる[15]。一方ガイタも，1897年に37才の若さで急死している。バルディックはそれをモルフィネ中毒による死だとあっさり片付けている[16]。

以上，ユイスマンスがブーランに示し続けた信頼と愛着ぶりはいささか異常な程である。何はともあれ，ユイスマンスの作品には，のっぴきならぬ証拠として『カイエ・ローズ』が突き付けられるまで彼が誤解し美化し続けたブーランの好ましいイメージが，『彼方』ではジョアネ博士として，『出発』ではジェブルザン師として定着されている。

(5)苦悩の核としてのアンナの業病

思えばアンナ・ムーニエが引きずり込まれた狂気への道程に全ての発端があったように思われる。アンナの身にふりかかったこの人生上の災難はおそらくユイスマンスの人生観と世界観をその根底から激しく揺さぶったのだ。その結果，ユイスマンスはゾラと共に自然主義文学に賭け，全く切り捨てていた未知の世界の存在に気付かされた。その時，精神を病む者が頻出するポーの作品や，悪夢を描いたとしか思われないルドンの絵は如何に切実な共感をもって彼に読まれ，眺められたことだろう。気をつけてみると，〝未知の世界〟に立脚した芸術家が生み出す作品は実に奥深い魅力に富んでいた。

アンナは発作が起きると幻覚に捉われたが，そうした状態は精神医学の知識が普及する以前は一般に〝悪霊に取り憑かれた状態〟とみなされていた。それゆえユイスマンスの中でもおそらく次のような連想が生じたと推察される。すなわち，〝悪霊→悪魔→霊界→〔神〕〟つまり，アンナが現にそれによって取り憑かれている悪霊がある以上，霊界は存在する筈である。その霊界は神の領分と悪魔の領分に二分されている…

この時，デカダン精神の持主，ユイスマンスは，神の領分は所詮自分には縁がないとして背を向けてしまい，悪魔の領分をのぞき込もうとするのだ。霊界に興味をもった人間が神に顔向けできない場合，彼はその対極にある悪魔をみつめるしか手がないわけである。

至高の善への道を閉ざされている者はせめて悪の極致をきわめようとする。ユイスマンスのみるところ，それを果敢にやりおおせたのがジル・ド・レーであったのだろう。すなわちユイスマンスはジル・ド・レーの研究を口実にして，究極の悪を探ろうとしたのだ。到底不可能な禁欲におじ気づいて神を断念し，全ての欲望を容認するサタンと手を結んだ場合，一体どれ程の快楽が約束されているものなのか。〝無力と平凡〟がモットーのメダン

のくびきを脱した激情家のユイスマンスにとっては，ひとまず究極に迫ろうとする情熱そのものが快感である。

さて，アンナはその症状からみて分裂病の可能性がうかがわれるが，病巣が特定できない精神病は，実証主義的，唯物主義的研究がめざましい成果をあげつつあった19世紀の医学もお手上げの領分であり，温水浴，冷水浴，電気ショック等の治療法を，さして確信の持てぬまま試みるのが精一杯という有様であり，一旦精神病患者の烙印が押されれば，完全治癒ははなから絶望視され，彼や彼女は公共病院の裏手の監獄のような所に押しこめられるという状態であったという。シャルコやフロイトはユイスマンスの同時代人であり，彼等も又そうした地点から精神病の解明を出発させたのであった。

(1)の項の引用文中に見られたように，ユイスマンスがシャルコの名を恨みがましくひきあいに出すのは，明らかにシャルコが当時の最先端をゆく科学者でありながら，否，科学者であるからこそ，アンナの人格崩壊への歩みの阻止すらままならないでいることへの憤懣から来ているのであり，実際，精神病をも彼の得意とする神経病のレベルで捉え，従って，きっとどこかにその病巣がある筈だという思い込みから抜け出せなかったシャルコは，素人さえ十分には説得できない伝統的な子宮理論に振りまわされる面があったのだろう。

アンナが最終的に収容されることになったサンタンヌも，先に述べたような悲惨な施設の一つであっただろう。だからこそ，収容される直前，アンナがどこへ連れて行かれるのかも知らず喜々として身仕度をするのを見るのはユイスマンスにはつらくてたまらないことだったのだ。

この苦しみから逃れたくてユイスマンスは宗教に救いを求めたのだとギュスターヴ・ギッシュは説明した。レオン・ドゥフーは，サンタンヌでアンナが亡くなった時，ユイスマンスは苦しみのあまり，始めてエーブル街の聖堂—そこはサンタンヌから一番近い聖堂であった—に逃れ込んだのだと説明した。

ギッシュの説明通りなら，ユイスマンスが宗教に救いを求め始めた時点は1893年春，ということになる。ドゥフーの説明通りならば同じくそれは1895年ということになる。バルディクはこの両者を日時確認の不正確さゆえに叱っている[17]。なぜなら，1892年夏の時点ですでにユイスマンスはイニイ修道院で半生の告白を済ませ，ついで初の聖体拝受の儀式にあずかっているからである。ちなみに，1895年は，回心の前後の事情を詳しく語った，『出発』刊行の年である。

（平成4年9月11日受理）

註

1）Robert Baldick;*La vie de J. K. Huysmans,* traduite de l'anglais par M. Thomas, Denoël, 1958, p. 173

2）ibid. , p. 195

3）ibid. , p. 174

4）ロラン・エディゴフェル（田中義廣訳）『薔薇十字団』白水社, 1991年

5）『錬金術とタロット』（河出文庫，1992年）所収，（175頁～226頁）

6）*La vie de J. K. Huysmans* p. 175

7）ユイスマンス（田辺貞之助訳）『彼方』，世界異端の文学V，桃源社，昭和41年；11頁，12頁

8）註4）に同じ；132頁
9）*La vie de J. K. Huysmans* p. 189
10）ibid. , p. 251
11）ibid. , p. 227
12）ibid. , p. 194
13）同上
14）ibid. , p. 200
15）ibid. , p. 205
16）ibid. , p. 253
17）ibid. , p. 255